

私の学生時代

学生相撲の横綱

菅谷 定

私は中学(現高校)の柔道選手として武徳殿の全国大会等では中堅級として出場したが、相撲は見るのは好きだが自分でやることは嫌で、部から引張り出されても逃げ廻っていた。この頃、大相撲先代春日野(元横綱栃木山)より熱烈な勧誘をうけたこともあった。また鏡岩(元横綱鏡里の師匠)錦城山(元大阪大関)肥州山(元関脇)等とガンガン稽古をやったものである。同志社入学の年、猿丸氏が全国優勝したその翌日、土俵の練習を観戦していたところ、同氏が「自分の後嗣に母校のため是非やれ」と大勢がかりでとうとう裸に禪をしめられ、土俵に放り上げられた。丁度この年は同志社へ入学してのんびりした生活

環境から一年間に十貫余も目方がふえ体力も充実して来たのか、自分でも意外なほど馬力がついて全盛時の猿丸氏と好戦、他のレギュラーには殆んど負けぬといった調子で、コレ

はものになると周囲はヤイヤイおだてる。ひくにひかれず遂に入部させられた格好で、翌予科二年の初土俵には、当時、関西ナンバワシ大園大某を破って男をあげ、全国大会でも第一年度から優勝候補にあげられた。しかしローマは一日にしてならず、完成までには年月を要し、のち横綱をとり各種全国大会には優勝、昭和五年には日本選抜学生として渡米、あちらの大会でも相撲、柔道とも優勝してほとんど全タイトルを獲得したが、顧みて自分にもう少しファイトがあつたら、また同志社にかつての早慶や関学のような右にかじりついても「物にせずんば止まず」と言った負けじ魂があつたら、少く共悠々三回位の連続全国制覇はなし得て不滅の記録を残し得たであろうと後悔される。鉄は赤いうちにうて、何時如何なる場合にも全力を出し切ることを信条として倒れて後止むで「ベストを尽したがこれ迄しかなし得なかつた」とすればそこに諦観というか悟道の境地があると思う。ただ、こ

のベストを尽すにも問題があるわけで主観的にも、客観的にも全力を尽し切ったのでなければならぬ。独りよがりの自己満足であつてはならない。

今の大学生もすべてが学究でもあるまいし、スポーツによって身心を鍛練しておくことは他日実社会に出てもスポーツ人の頑張りずムは各方面でも重宝がられているし、浮世の浪風を突切つてゆく上にもその練習が大いに役立つように思う。まして一つの部門で一応大成したならば、それが社会生活においても一つの自信となり信念ともなつてゆくことは間違いないところだ。スポーツの栄冠のダイゴ味は全学園あげて歓喜のルツボ、左右の対立も理事者対教職員学生の対立もとける筈だ。私達の当時は大塚前総長ほか教職員あげて応援に来ていただいたものだ。

オリンピックは参加することに、もちろん、大いなる意義がある。しかし、どのスポーツでも秀いでるには鍛練の上にも人力の最高限度まで鍛え抜くことはもちろん、真の大成には天分とテクニクのはか人性格、人間性の円熟がなくては完成でぬことだ。現代で大鵬は一応歴史的横綱と言われたのだが、あれだけにな

っても練習量は随一とのことだ。これは横綱になっても自己満足することなく更に目標を大にして己に打ち鞭打ってゆく人間性の深さによるものと言うべく、幕内関取になって有頂点になるものと性格の開きにほかならぬと思う。母校も関西私学の雄を誇示しているようだが、さらに一段飛躍して名実とも私学ナンバーワンを目指して、さらに充実して貰いたいものだ。先日、大塚前総長退任の辞を説いたが、その第一項に学園の平和を最大義にされたことはもつとも至極。従来同志社は往々勢力の対立のようなことで折角盛上ったものが都度逆行して、これが学園の発展を妨げたように思う。衆議をつくして決定した以上、小我を捨て大乗的に母校のために集中する精神が肝要だと思う。スポーツにおいてもチーム内の人の和は如実に成績に反映することは不思議な位数字に表われる。我々の時でも群雄割拠、実力では充分優勝すべきスタッフを有しながら、和を欠いたため敗を重ねて覇権から遠ざかった年もあれば、反面小粒で到抵園内に入り得ないと自他共に評価された時でも、妙に気分が一致して練習にも気が入ってイザ試合となって不思議な程力が

出て、人もフロックと驚く優勝をなし遂げた年もある。顧みて不思議と思われる程で10の力が13・15にもなるのと8・7に低下するのと上下大きな差となる。すべての団体行動、大きな事業に至るまでこれは大切なことである。学校行政にも政治にも大事なことで、大塚前総長が人の和を説かれ近年稀な治蹟を残されたことも宜なるかなと敬意を表する次第である。

第二次大戦後原爆、原子力の発明等もあって小競合を除いて一応平和の夢を追い。ことに日本は国民泰平を謳歌、ジャズ、深夜クラブ、パチンコ、マージャン、競輪、ボーリング、プロ野球と骨抜き的享楽を追求めて日夜もないが、果してこれでもよいものであろうか。平和スポーツというがオリンピックの華陸上競技におけるハンマー、槍、円盤、砲丸、棒高跳等オリンピック時代の戦備的鍛練の名残りであり、平和はもとより望むべきも、人類あるところ争鬪の歴史は恐らく形を変えても永遠に繰返されるであろう。しよせん軍備の均衡の形で平和の水平が保たれると言うことは嘆わしいことではあるが「理想と現実」の相違とも言うべきであろう。とすれば自己、

家庭を守り、国家社会を守るためには絶えず自ら鍛練して「平和のための防衛力」を養っておく必要がある。各家庭でも夜は侵入者に備え雨戸を締め戸締りをしなければならぬし、李ラインでは漁船が引続きダ補され、竹島は朝鮮領と主張され有力な抗議もせぬ様子、軍備のバランス如何では何時尅岐、対馬にも侵入和が来ないとも限らない。王道で押しの利く時代はよいが徒ら児が武力をもちすぎることかつてのドイツ、日本のようにもなる。現代のソ連、朝鮮にもその弊なきや。武力放棄、無抵抗主義も結構、原爆下鉄砲の軍隊は玩具だと一部学者は唱えるが彼らに夜雨戸、玄関を解放して寝るや、李ラインで漁船をダ補され同胞が監禁されてよいものか、満員電車で足を踏んだ、踏まれたの争鬪はどう解決したらよいか反問したい。

日本人ほど盲従的で時代を大局から觀察判断する力を欠いた民族も少いように思う。かつての軍国主義がしかり、戦後労働運動がしかり、全学連も今日の享楽頹廢思想もしかり。オリンピックを迎えてオリンピックの昔に返って健全なスポーツ精神を喚起する必要を痛感する。(昭七大法卒・第一商事(株)社長)